

# 庭野平和財団 活動助成 報告書

コード番号:09-A-047

財団法人 庭野平和財団  
理事長 庭野欽司郎 殿

2010年[平成21年] 9月28日

申請団体 特定非営利活動法人三重県子どもNPOサポートセンター

代表者氏名 ふりがな たなべ ちよこ 役職名 生年月日  
田部 知代子 印 理事長 昭和13年3月26日 生

申請団体住所 〒514-0125 Tel:059-232-0270  
三重県津市大里窪田町2709-1 Fax:059-232-0271  
E-mail:mie-kodomo-npo@za.ztv.ne.jp

連絡責任者氏名 ふりがな たけむら ひろし 役職名 生年月日  
竹村 浩 事務局長 昭和33年8月20日 生

連絡先 〒514-0125 Tel:059-232-0270  
三重県津市大里窪田町2709-1 Fax:059-232-0271  
E-mail: mie-kodomo-npo@za.ztv.ne.jp

助成事業の名称 対象分野( 1 2 )  
子どもの権利フォーラム・マタニティフェスティバル～子どもの権利は胎児から～

助成金額 200,000 円

## 1. 活動の目的

現代の日本の子どもたちの状況は、非常に危うい状況だと思えます。物質的には恵まれているかもしれませんが、精神的には大人の社会を反映して殺伐としています。根本的には大人社会の経済最優先、格差があつて当たり前という考えを、変えていかなければどうにもならない側面もありますが、私たちは、今生きている子どもたちとこれから生まれてくる子どもたちが、「生まれてよかった。」「幸せだ。」と思えるような社会を作りたいと思っています。そのためには、子どもたちが「自己肯定感」を持ち、エンパワメントするとともに、社会的な整備も必要だと思えます。

昨年は「子どもの権利条約フォーラム2008in みえ」を開催し、「子どもの権利」について、参加者と主催者ともに学びあいましたが、今年度は「子どもの権利フォーラム・マタニティフェスティバル～子どもの権利は胎児から～」を開催し、再度「子どもの権利」を社会に問いかけていきたいと思えます。

フェスティバルの内容としては、

- ① 妊娠・出産に対しての妊婦のイメージを高め、胎児にも人権があることを学びながら、よりよい

出産をサポートする。

- ② そのための人材を育て、今後地域でサポート体制を確立していく。
- ③ また三重県や各市町が、子どもの権利条例を策定する準備として、県や市町の担当者や地域の市民活動団体に実行委員会に参加してもらい、今後の策定にむけて「子どもの声」が反映されるような取り組みを、地域で共に進めていく。

---

## 2. 活動の内容と方法

- ① フォーラムを開催するための実行委員会開催と議題整理のためのコア会議開催
- ② 当日のプログラム決定とプログラム担当のグループ会議開催
- ③ プレ企画開催と三重県各地域への広報
- ④ 協賛金集め
- ⑤ 開催後のまとめと報告書作成

---

## 3. 活動の実施経過

- ・実行委員会開催
- ・実行委員会のためのコア会議開催 実行委員会から、数名選出し、議題整理等をする。
- ・企画を実行するために、グループ会議を開催

### <実行委員会>

2009年	4月21日	第1回実行委員会
	5月18日	第2回実行委員会
	6月25日	第3回実行委員会
	7月27日	第4回実行委員会
	8月26日	第5回実行委員会
	9月16日	第6回実行委員会
	10月21日	第7回実行委員会
	11月18日	第8回実行委員会
	12月 9日	第9回実行委員会
2010年	1月13日	第10回実行委員会
	1月29日	第11回実行委員会
	2月 8日	第12回実行委員会
	2月24日	第13回実行委員会
	3月 8日	第14回実行委員会

### <コア会議>

2009年	5月13日	第1回コア会議
	6月20日	第2回コア会議
	7月 8日	第3回コア会議
	8月13日	第4回コア会議

	9月 1日	第5回コア会議
	10月 5日	第6回コア会議
	11月 9日	第7回コア会議
	12月 1日	第8回コア会議
2010年	1月28日	第9回コア会議
	2月17日	第10回コア会議
	3月25日	第11回コア会議

#### <グループ会>

- ・ いいお産グループ 毎月開催
- ・ 子育て・子育てを楽しむグループ 毎月開催
- ・ 子ども参画グループ 毎月開催

2010年2月27日～28日

「子どもの権利フォーラム・マタニティフォーラム～子どもの権利は胎児から～」開催

#### 「基調講演」報告

「小さな子どもにあたたかい心を育む～周産期・新生児医療から学ぶあたたかい心～」

講演者:仁志田博司先生(東京女子医大名誉教授・前母子センター所長)

#### <学歴及び職歴>

1968年3月 :慶応義塾大学医学部卒業

1972-74年:米国ジョーンズ・ホプキンス大学

バルチモア市立病院新生児フェロー

1974-84年:北里大学小児科講師

1984-88年:東京女子医科大学周産期センター助教授

1988-08年:東京女子医科大学周産期センター教授

1993-94年:米国ハワード大学新生児客員教授

2000-08年:東京女子医科大学周産期センター所長

(2008-09年 :町田市民病院周産期センター長)

2008年-現在:東京女子医科大学名誉教授

1984年-現在 ;早稲田大学人間総合学部研究員(生命倫理)

1995年-現在 :北里大学小児科客員教授

2007年-現在 :東海大学産婦人科客員教授

2008年-現在 :仁泉会医学研究所医学顧問

2008年-現在 :慈誠会病院名誉院長

#### <講演内容> (仁志田博司先生講演資料より)

演者が67年前に生まれたと頃の日本の乳児死亡率(1000人の赤ちゃんが生まれてから一歳までに死亡する数)は80以上であった。と言う事は生まれた子どもの約10人に一人が最初の誕生日までに亡くなってい

たのである。それが2006年の乳児死亡率は2.8となっており、アメリカの新聞にも「日本は世界一赤ちゃんが死なない国」(図と報道されるようになっている)。

なぜアメリカのみならずヨーロッパ諸国さえ抜いて、日本の新生児医療の成績が良くなったのであろうか。医学の進歩や医療制度の整備なども大きな要素であるが、それ以上に国が豊かになった時に「小さな弱い赤ちゃんでも私達の仲間だから一緒に生きよう」と考えるやさしい心を日本人は持っているからである。強い者が、賢い者が生き残るから人類が進化したというダーウインの考え方では、弱い未熟児や病児は助かってはいけないという考えになってしまう。西洋的な考え方はそのようであるが、私達日本人には、弱い人も一緒に共に生きよう、という歴史がある。それが、小さな未熟児や病気の赤ちゃんでも私達の仲間であると考えた社会ダイズムからの脱却の思想であり、今回の講演のメインテーマの「あたたかい心」に通じる。演者はこのことが日本が新生児医療が世界一になったもっと大きな要因と確信している。

「あたたかい心」とは愛とか優しさに通ずるものであるが、もう少し普遍的に相手の悲しみや痛みを自分の悲しみや痛みと感ずることのできる心である。人間が他の生き物と違う最も大きな特徴は、弱い人類が強い恐竜や猛獣の仲で生き抜くためには、社会を作って共に生きてゆく能力を勝ち得たからである。動物も群れを作っているが、それは生存のための本能である生殖の為・身を守るため・食物を得るためであり、人間のように相手を愛し、思いやり、信頼して、平和で幸せな世界を作り上げようとするレベルではない。

では人は、どのようにしてあたたかい心を学ぶのであろうか。いろいろなことが考えられる中で、人生の最初の乳幼児期に母親からの絶対的な愛(アガペ)を受けることによって学ぶプロセスが一番大切と考えられている。女性は子どもを育む(羽根含む)ことによって母性に目覚め、児に無償の愛(アガペ)を与えると、そのように育まれた子どもは、自分以外の人が自分を絶対的に受け入れ信頼してくれる人がいることを心に刻み込み、あたたかい心を持つようになる。

私達は、小さな赤ちゃんの命を助けることと脳性まひなどの重篤な後遺症から児を守ることに大きな成果を挙げてきたが、運動障害も無くIQも正常な児の中に、社会の中で他人とのコミュニケーションが上手いかず、行動異常や学習障害となる児を経験するようになった。その病態は相手の心を読み取る高次脳機能(心と呼ばれる機能)に異常があるためであり、その原因は赤ちゃんの脳の発育に最も大切な段階に、ストレスの多い環境に置かれたためと考えられている。すなわち、私達は赤ちゃんの命を助けることに目を奪われ、過剰な光・音・痛み刺激というストレスを与え、その心を育むやさしさを提供することを忘れていたのである。現在多くのNICUで看護師さんが取り組んでいる個別的発達促進看護(Developmental Care)はそのような背景から生まれたものである。

この宇宙では時間・空間・物質とすべてのものが連続であるが、私達は無意識に生活の知恵としてそれを不連続に捉えている。アメーバーから人間までの系統発達も、さらには胎児から新生児・子供・成人そして老人までも、連続したものである。私達は、今たまたま健康な成人であるが、かつては弱い赤ちゃんであり、未来は必ず弱い老人になるという、自分との連続を知れば、小さいから・弱いからと、また年老いたからと、未熟児や老人を切り捨てる心はおこらないであろう。その連続を考えながら共に生きることが、相手の痛みが自分の痛みとして感じるあたたかい心となる。

このような周産期・新生児医療から学んだ、小さな子どもにあたたかい心を育むことの重要性を伝えることによって、人がみなあたたかい心を持つようになれば、現在の「テロという憎しみの連鎖」を断ち切ることができるであろう。それが世界を破滅から救う唯一の方法であるとの信念から、演者はこれまで五年間はローマから奈良までのシルクロードの旅を続けている。

---

#### 4. 活動の成果

当日の参加者は延べ1,200人。基調講演参加者は270人でした。

参加者の方々には、それぞれのプログラムで楽しんでいただくとともに、学んでいただき好評でした。また、参画者として参画された方は、新しい出会いからネットワークを広げていかれたようです。このことは、今後地域で「子どもの権利」や「子育て支援」を展開する市民グループにとって、「こんなことを考えているのは、自分たちだけではない」とパワーアップする機会になりました。

実行委員会では、行政や専門職、市民が話し合いを続ける中で、お互いの理解も深まり、今後の連携に向けていろいろなアイデアが出てきました。

津市と松阪市では、地域会議を開き地域の行政、市民、市議などが「子どもの権利」について話し合いを重ね、「子どもの権利条例」作りへの基盤ができました。

またユースが実行委員会を作り、話し合い、県内の小学校・中学校・高校の生徒へ向けて「自己肯定アンケート」を実施し、8000人余りの子どもの声を聞くことができました。そしてこの声を分析し「自己肯定アンケート報告書」を作成しました。

このように、今回の「子どもの権利フォーラム・マタニティフェスティバル」は、「子ども達が『自己肯定感』を持ち、エンパワメントするとともに、社会的な整備も必要」という目標にむけて、大きな一歩を踏み出したと思います。

---

#### 5. 今後の課題

今回のフォーラムで一緒に活動してきた、産婦人科医・助産師・保健師・看護師などの専門職の方々や、行政担当者や地域の市民活動団体と今後もネットワークを作り、三重県内各地域で「子どもの権利条例」が制定され、子どもの権利を保障し、子どもが持てる力を存分に発揮できるような社会を作ることが、大きな課題です。

※「子どもの権利フォーラム・マタニティフェスティバル」全体の報告書を添付します。